

清武町埋蔵文化財調査報告書 第9集

SAKAMOTO
坂元遺跡

県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査概要報告書

2001

清武町教育委員会



坂元遺跡全景(東から)

序

本書は、清武町船引地区で進められている県営農地保全事業に伴い、平成12年度事業地で実施した坂元遺跡の発掘調査概要報告書です。

町北西部船引地区に広がる台地上での本事業に伴う発掘調査も6年目をむかえ、確認された資料もかなり充実したものになってまいりました。特に縄文時代に蒸し焼き料理をしたと思われる集石遺構については、毎年数十基合計では約200基以上確認され、遺構そのものの特徴はもちろん、自然科学分析から得られる資料も含めて縄文時代の食生活の一部を解明する貴重な資料になるでしょう。本年度調査を行った坂元遺跡でも集石遺構について幾つかの注目される点が見られましたので、本書においてその一部を紹介していきたいと思います。

また、これら先人たちの残した文化遺産が、21世紀を担う子供たちへ着実に継承されるとともに、子供たちの豊かなこころを育む教育の場に、‘生きた資料’として活用されることが出来れば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大な御協力をいただきました船引土地改良区をはじめとする地元の皆様に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

清武町教育委員会

教育長 湯地敏郎

例 言

1. 本書は、県営農地保全事業（船引地区）に伴う、坂元遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体	清武町教育委員会
事務局	
教 育 長	湯 地 敏 郎
教 育 次 長	田 宮 防 太 郎
社会教育課長	谷 口 紘 一
社会教育課文化係長	川 越 健
社会教育課主査	伊 東 但
調 査 員	
社会教育課主事	井 田 篤
社会教育課嘱託	松 原 一 哉
社会教育課嘱託	安 楽 哲 文

3. 図面の作成は井田・松原・安楽他、実測補助員（
）が行い、一部を（有）ジバング・サーベイ
に委託した。
4. 遺物、図面の整理は、清武町文化財管理事務所において、井田及び整理作業員（
）が行った。
5. 挿図の実測、拓本、トレースは井田、船石、沼口、若藤、久保が行った。
6. 本書に使用した写真は、井田、松原が撮影し、空中写真については（株）スカイサーベイに委託した。
7. 本書に使用した記号は次のとおりである。
S I : 集石遺構 S C : 土坑 S A : 竪穴式住居
8. 本書に使用した方位は磁北で、レベルは海拔絶対高である。
9. 基本土層や遺構埋土の色調については、「新版 標準土色帖」（1997年後期版）の土色に準拠した。
10. 本書の編集・執筆は井田が行った。

目 次

第1章	はじめに	1
第1節	調査にいたる経緯	1
第2節	遺跡の位置と環境	1
第3節	調査の概要	4
第2章	B区の調査について	6
第1節	集石遺構と連穴土坑	6
第2節	小括	12
第3章	E区の調査について	13
第1節	竪穴式住居	13
第2節	集石遺構	13
第3節	陥し穴	16
第4節	旧石器の調査	16
第5節	小括	16
第4章	出土遺物	17
第5章	まとめ	17
調査妙録		21
	坂元遺跡	21

挿 図 目 次

第1図	位置図(1/50000)	2
第2図	坂元遺跡周辺地形図(1/5000)	3
第3図	坂元遺跡基本土層図(1/30)	4
第4図	坂元遺跡全図(1/1500)	5
第5図	B区集石遺構及び連穴土坑配置図(1/80)	7
第6図	B区集石遺構及び連穴土坑出土遺物1(1/2)	9
第7図	B区集石遺構及び連穴土坑出土遺物2(1/2)	10
第8図	E区集石遺構及び焼礫分布図(1/400)	15
第9図	SI-36(1/30)	15
第10図	SI-11(1/30)	15
第11図	SI-14(1/30)	15
第12図	SI-1(1/30)	15
第13図	坂元遺跡出土遺物実測図1(1/2)	18
第14図	坂元遺跡出土遺物実測図2(1/2)	19

図 版 目 次

図版1	坂元遺跡基本土層断面	4
図版2	SI-27~31検出状況	8
図版3	SI-27~30の配石	8
図版4	SI-56・SC-5	8
図版5	SC-6の焼土部分	8
図版6	SI-67・SC-8~13検出状況	8
図版7	SI-67・SC-8~13攪拌状況	8
図版8	B区集石遺構及び連穴土坑出土遺物	11
図版9	B区全景	12
図版10	SA-1完掘状況	13
図版11	SI-36	13
図版12	SI-62	13
図版13	SI-14	14
図版14	SI-1	14
図版15	SI-33	14
図版16	SI-11	14
図版17	SC-1断面	16
図版18	SI-73	16
図版19	坂元遺跡出土遺物	20

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成7年度より行われている清武町船引地区の県営農地保全事業に伴い、事業区の一部に坂元遺跡が含まれることが確認された。遺跡の取り扱いについて宮崎県中部農林振興局と慎重に協議したところ、耕作土の確保等の事業設計上の理由により、やむを得ず削平されることとなった部分及び新設される道路・排水路部分において発掘調査を行い記録保存することとなった。

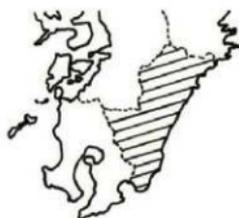
調査は宮崎県中部農林振興局の委託を受け清武町教育委員会が実施し、期間は平成12年4月25日から平成12年12月18日まで、調査面積は約9,000m²である。尚本遺跡においては2枚の文化層が確認されている。

第2節 立地と環境

激動の幕末から明治にかけて当代随一の儒学者としてその名を馳せた「安井息軒」を生み、現在では6校もの大学が町内近隣に立地する文教田園都市清武町は、県央宮崎平野の南西部に位置し、県庁所在地である宮崎市の南西に隣接している。坂元遺跡は町北西部の船引地区に所在しているが、この地区は、古くは『平家物語』や『建久八年日向国函田帳』などにもその名がみられ、また今でも船引神社の大楠や船引神楽など数多くの文化財が残る地区である。

本遺跡は町内を流れる清武川左岸のシラス台地上に位置し、標高は75m～85mで、昨年度調査を行った山田第1遺跡の南側に隣接している。また、本遺跡は台地の平坦部に立地しているが、台地に東西から入り込むそれぞれの谷に傾斜し始めるいわば平坦部の両端の部分に遺構や遺物が集中しており、少し窪んだ平坦部中央からはほとんどなにも確認されなかった。

近隣には宮崎県教育委員会主体によって調査が行われ、縄文時代後期及び古墳時代中期の竪穴式住居や、中世から近世にかけての掘立柱建物跡などが検出された上ノ原第1・2・3・4遺跡、カマドを有する竪穴式住居が検出され、当台地上で営まれた古代の小規模集落の存在が確認された白ヶ野第2・3遺跡、又当教育委員会が調査を行い、旧石器時代の剥片や縄文時代早期の装身具などが出土している白ヶ野第1・第4遺跡、直径約2.3mの掘り込みをもつ巨大な集石遺構や逆茂木痕をもつ陥し穴遺構などをはじめとして、旧石器から中世まで幅広い時期の遺構や遺物が確認された滑川第1・第2・第3遺跡、連穴土坑や陥し穴が確認された山田第2遺跡、又今後の調査が予想される上猪ノ原遺跡、下猪ノ原遺跡などが所在する。



九州南部略図

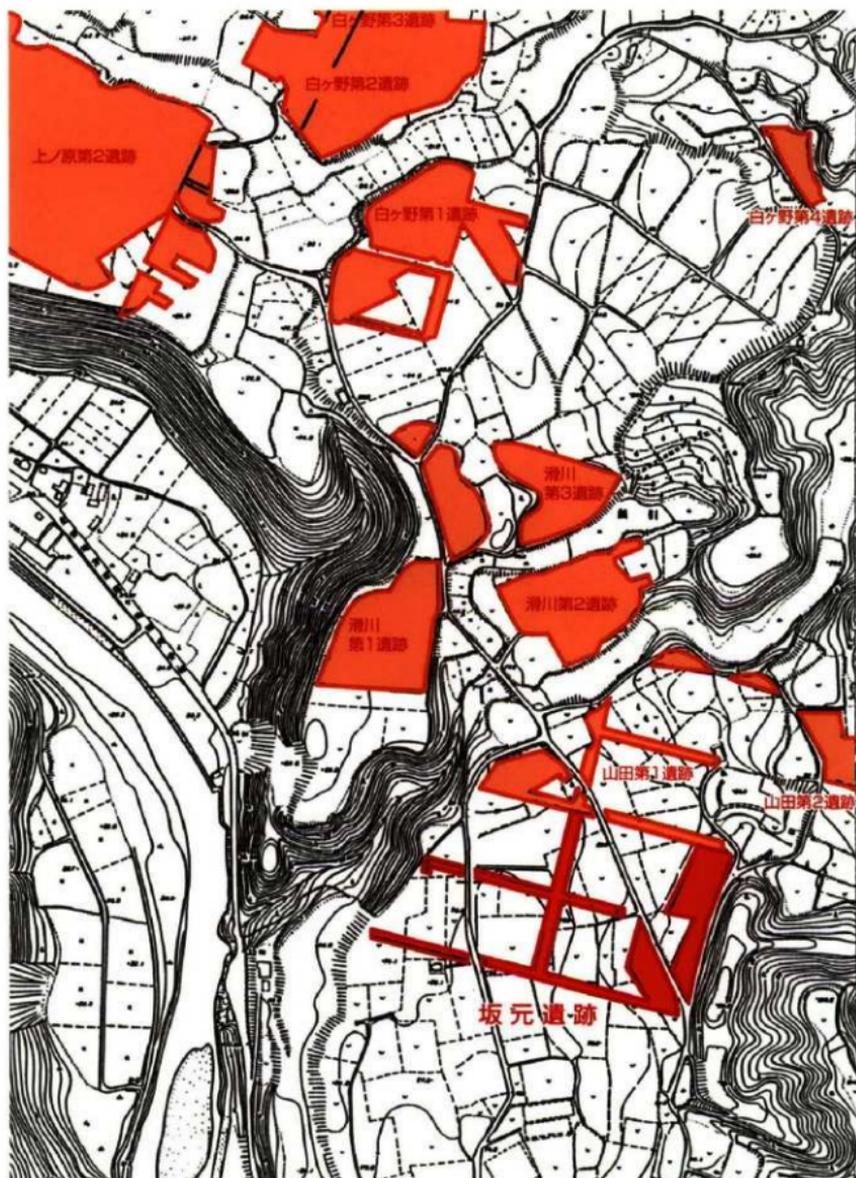


■ 清武町



- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 上ノ原第1遺跡 | 2. 上ノ原第2遺跡 | 3. 上ノ原第3遺跡 | 4. 上ノ原第4遺跡 | 5. 白ヶ野第3遺跡 |
| 6. 白ヶ野第2遺跡 | 7. 白ヶ野第4遺跡 | 8. 白ヶ野第1遺跡 | 9. 滑川第1遺跡 | 10. 滑川第2遺跡 |
| 11. 山田第1遺跡 | 12. 山田第2遺跡 | 13. 坂元遺跡 | 14. 上猪ノ原遺跡 | 15. 札立第2遺跡 |
| 16. 札立第1遺跡 | 17. 下猪ノ原遺跡 | 18. 園田遺跡 | 19. 権元原遺跡 | |

第1図 位置図 (1/50000)

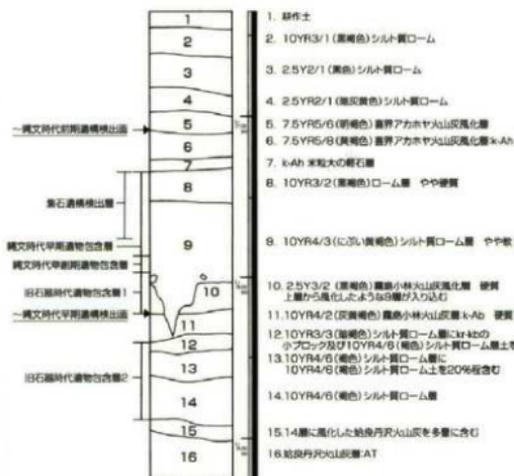


第2図 坂元遺跡周辺地形図 (1/5000)

第3節 調査の概要

本遺跡の調査では、調査進行上の都合により調査区をA・B・C・D・E5つに区分けし、A区・D区については事前に行われた試掘調査の結果及び地形的理由から、表土剥ぎ取り後トレンチ調査のみを実施したが、遺構及び遺物は殆ど確認されなかった。

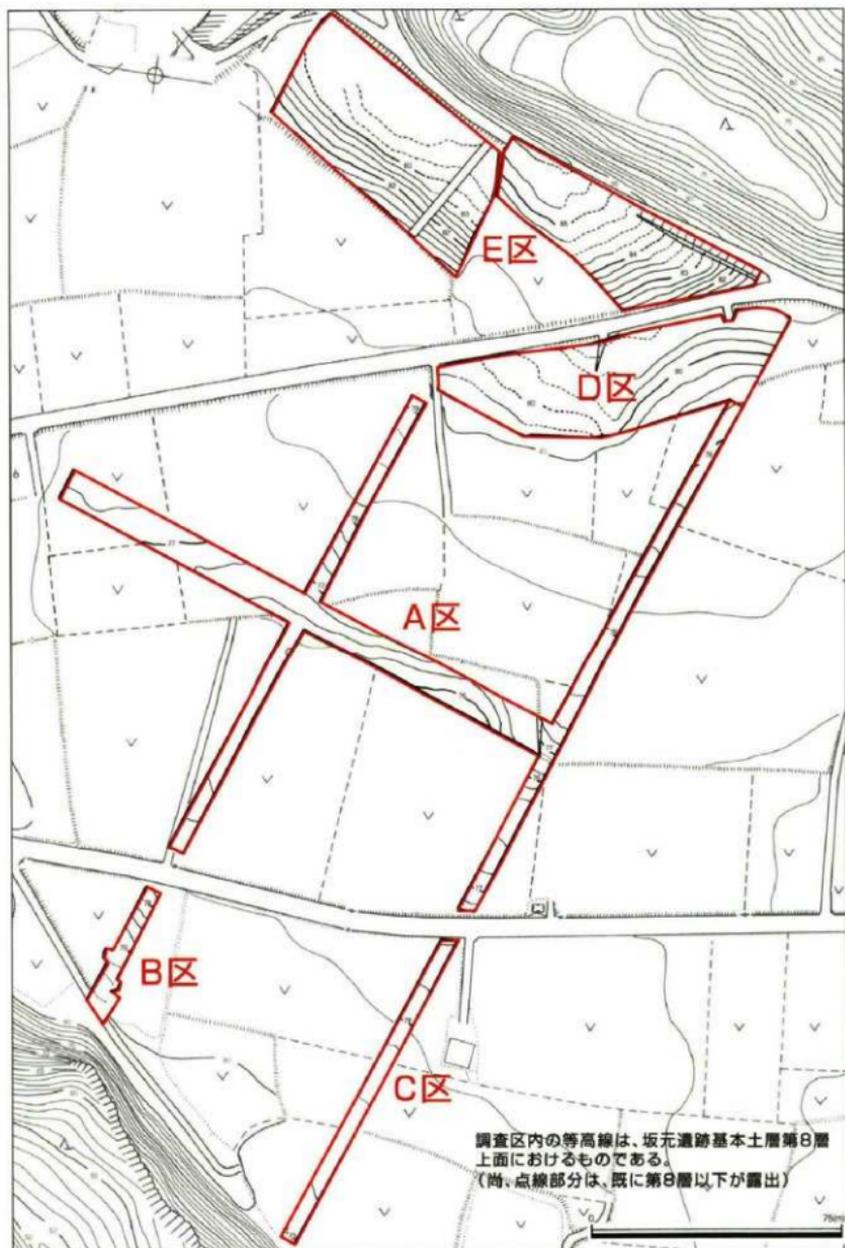
B区・C区・E区については、表土剥ぎ取りを行ったところ、アカホヤ火山灰層(第6層)から霧島小林火山灰層(第11層)[第3図 坂元遺跡基本土層図参照、尚今後使用する層位についても同様]にかけての様々な層が既に露出している状況であった。調査はアカホヤ火山灰層(第6層)が残存している範囲におけるアカホヤ火山灰層(第6図)上面での縄文時代前期以降の遺構の検出作業から行い、検出された遺構の記録作業終了後、重機により第6・第7層を除去、その後、縄文時代早期・草創期の遺物包含層であり、また集石遺構が確認される可能性の高い第8層から第9層を人力で掘下げていった。集石遺構以外の縄文時代早期・草創期の遺構については霧島小林火山灰層(第11層)上面で検出作業を行い、逆茂木痕を持つ陥し穴が1基、T字に繋がった連穴土坑が2基確認された。またC区・E区において、旧石器時代の調査を一部実施したが、地形的に良好なE区においては、第12層で焼礫群が確認された。



第3図 坂元遺跡基本土層図 (1/30)



図版1 坂元遺跡基本土層断面(西から)



第4図 坂元遺跡全圖 (1/1500)

第2章 B区の調査について

第1節 集石遺構と連穴土坑

調査面積約250m²のB区において、第8層及び第9層の掘り下げ作業を行ったところ、第8層の上位から第9層の中位にかけて約10,000点の礫が検出された。礫群の厚さは0.5m程で、礫の殆どは熱を受けて赤変した拳大の角礫だった。その礫を出土地点を記録しながら取り除いていったところ、第9層中位において3つの遺構群が確認された。

1つ目は、直径約1.5m～2m、検出面からの深さが約0.5mの掘り込みを持つ5基の集石遺構が切り合うものであった。(SI-27・SI-28・SI-29・SI-30・SI-31)

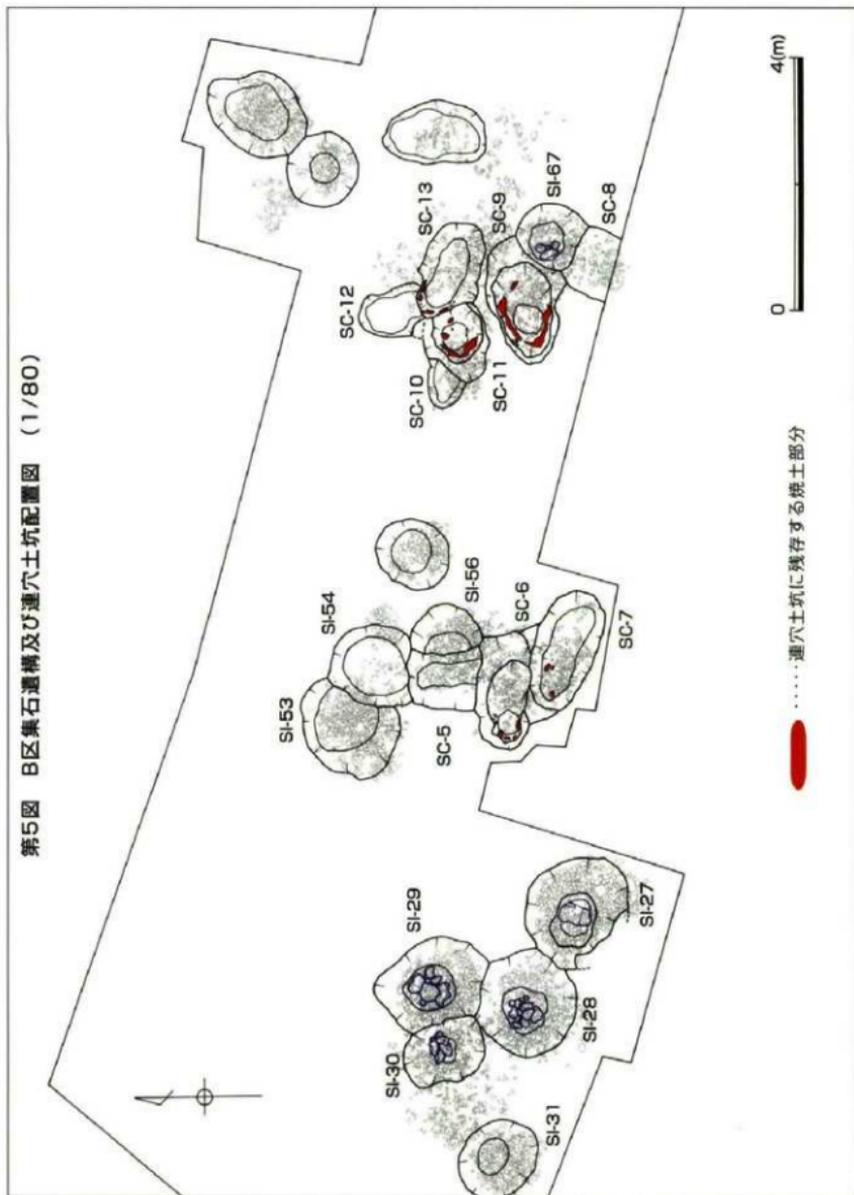
SI-27とSI-28、SI-28とSI-29、SI-29とSI-30、とそれぞれ繋がるように切り合っていたが、埋土は4基とも炭化粒を多量に含む黒色土であり、新旧関係は不明である。それぞれに使用されている礫は次のとおりで(SI-27が約1100個で約220kg、SI-28が約750個で約100kg、SI-29が約1000個で約150kg、SI-30が約650個で約60kg)、その殆どが熱を受けて赤変した拳大の角礫、すなわち掘り込みの外に散在する角礫と同様のものであった。また掘り込み内においては、近隣の滑川第1遺跡で確認された壁面に礫を張り付けるといような意図的な構築は見られず、どちらかという無造作に礫が投げ込まれている様な状況であった。しかし掘り込みの底面付近においては、4基全てに人頭大の礫1個ないし数個を使用した敷石が配してあり、こちらは意図的な可能性もあると推測される。また、SI-31は、掘り込みや使用されている礫(約950個で約105kg)の状況は他の4基と似通っていたが、埋土が炭化粒をわずかに含む茶褐色土で敷石も見られなかった。SI-30との間にも焼礫は検出されるものの、お互いの関係は不明瞭な状況であった。

2つ目は、2ないし3基の集石遺構と3基の連穴土坑が切り合うものであった。(SI-53・SI-54・SI-56・SC-5・SC-6・SC-7)埋土はいずれも炭化粒を含む黒色土であったが、連穴土坑の埋土には焼土粒がわずかに含まれていた。またSI-56とSC-5の新旧関係についてはSC-5が新しく構築されたと思われるが、SC-6とSC-7の新旧関係については不明である。ただこの2基の連穴土坑が、舟形のプランと長楕円形のプラン(ブリッジであったと推測される部分はくびれている)という異なったタイプの連穴土坑であることは注目に値する。

最後は、1基の集石遺構と6基の連穴土坑が切り合うものであった。(SI-67・SC-8・SC-9・SC-10・SC-11・SC-12・SC-13)SI-67は直径約1m、検出面からの深さが約0.3mの掘り込みを持ち、床面近くに敷石を配したいわばSI-27やSI-28の小型版ともいえるタイプの集石遺構であった。一方それと切り合っている連穴土坑群は、前述の滑川第1遺跡や山田第2遺跡の様に単体では検出されず、拡張を繰り返したことを想像させる様に繋がった状態で検出された。連穴土坑群が拡張されていった様子はそのプランからある程度推測されるものの、集石遺構と連穴土坑との新旧関係については、切り合い部分の埋土(炭化粒を多量に含む黒色土)が似通っていたため、明確な結論が導き出せなかった。

尚、B区の集石遺構及び連穴土坑の掘り込みのなかには、1基に数点合計では数十点の遺物が入り込んでおり、なかでも多かったのは山形や楕円の押型土器であった。

第5図 B区集石遺構及び連穴土坑配置圖 (1/80)





図版2 SI-27~31検出状況(北から)



図版3 SI-27~30の配石(北西から)



図版4 SI-56・SC-5(東から)



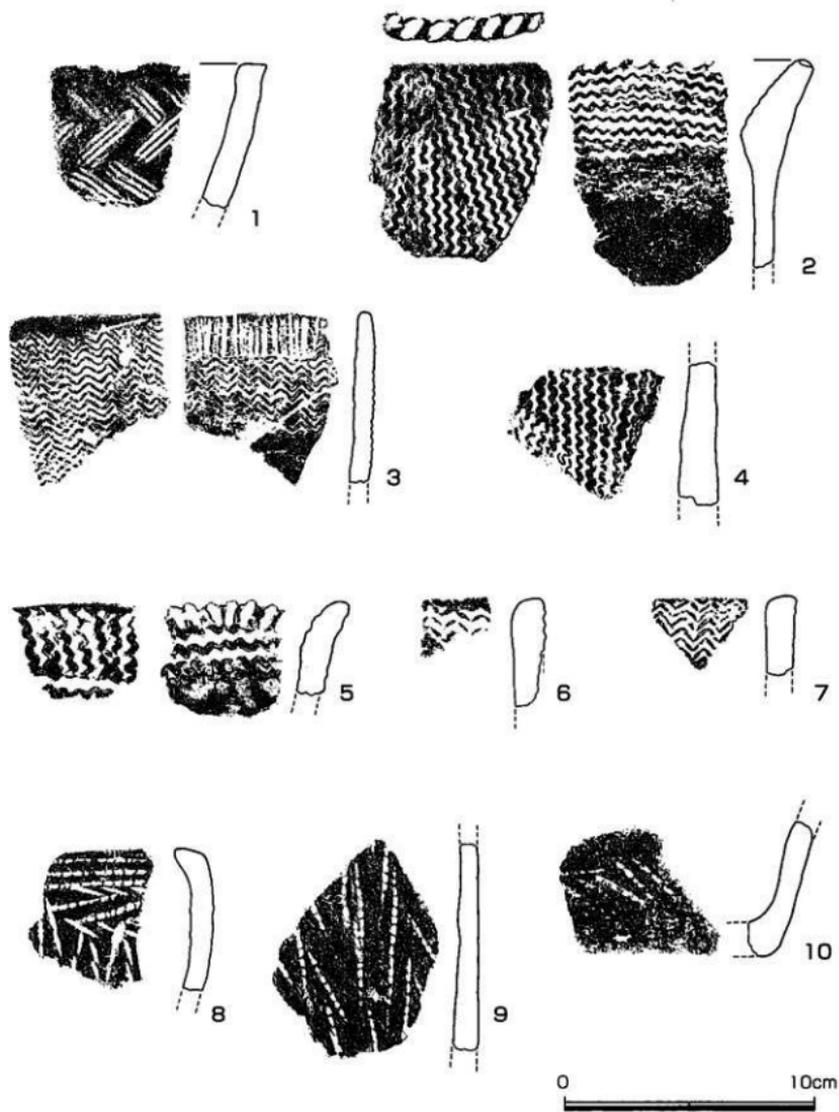
図版5 SC-6の焼土部分(東から)



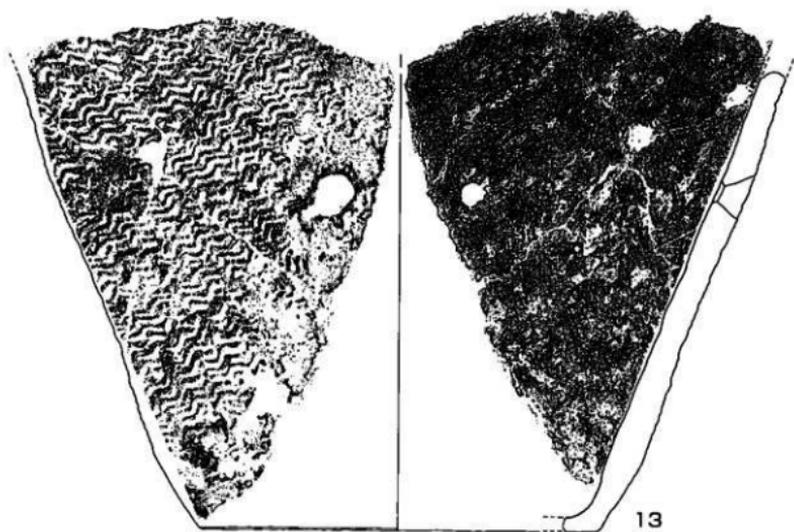
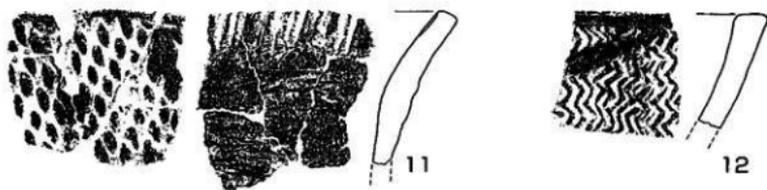
図版6 SI-67・SC-8~13検出状況(東から)



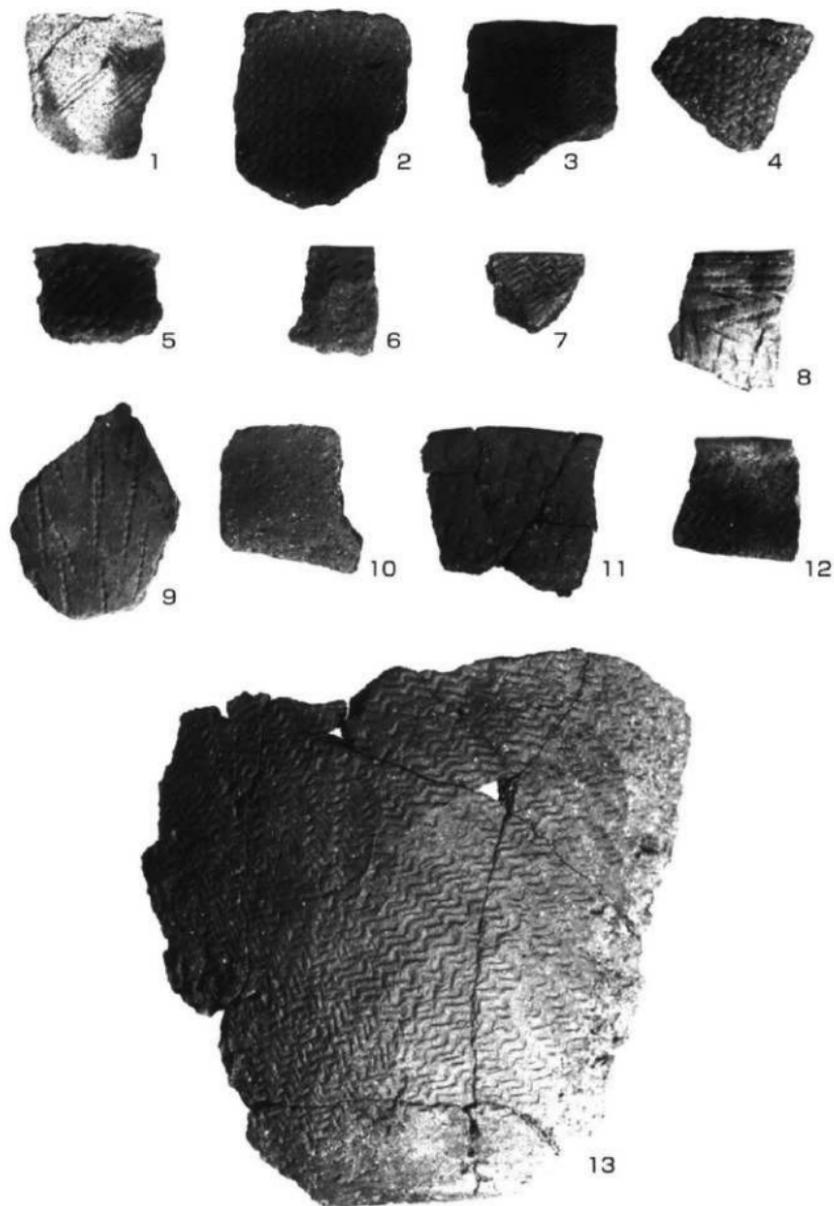
図版7 SI-67・SC-8~13発掘状況(東から)



第6図 B区集石遺構及び連穴土坑出土遺物1(1/2)



第7図 B区集石遺構及び連穴土坑出土遺物2(1/2)



図版8 B区集石遺構及び連穴土坑出土遺物

第2節 小 括

今回B区では新設される排水路部分のみ約250m²の調査であったが、約10,000点にもおよぶ礫が散在する礫群、また集石遺構同士や集石遺構と連穴土坑が切り合う3つの遺構群など興味深い資料を数多く確認することができた。この遺構や遺物の密度の濃いB区の遺跡の性格を考察する上で重要になってくるのが、本遺跡の北側に広がる山田第1遺跡G区の存在であろう。(清武町文化財調査報告書第8集 山田第1遺跡・山田第2遺跡参照)このG区でも約1,900m²の調査区で約18,000点の礫(殆どが熱を受けて赤変した角礫)が出土し、計7ヶ所の遺構群が確認されている。その殆どが集石遺構同士の切り合いで、連穴土坑との切り合いは明確なもの確認されなかったが、集石に使用されている礫の様子や相伴している遺物、また検出された層位など本遺跡B区と似通った状況が数多く見られた。また、山田第1遺跡G区と本遺跡B区との間の耕作地の表面及び表土にも、数多くの礫が確認され、谷を望む台地の端にあたるこの一帯で縄文時代早期に巨大な遺跡が存在したと推測される。尚、B区の80m程南側のC区においては、3基の集石遺構(全て単体)とわずかな礫が確認されたが、B区と比較すると格段に遺構や遺物の密度が薄くなる状況であり、同一の谷を囲む遺跡群(滑川第1遺跡、第2遺跡、山田第1遺跡、本遺跡)の広がり考察する上で一つの目安となろう。



図版9 坂元遺跡B区全景(真上から)

第2章 B区の調査について

第1節 竪穴式住居跡

第8層上面で竪穴式住居跡が1軒検出された。平面プランは隅丸方形で、検出面から掘り込み床面までの深さは約0.3mであった。柱穴は東西の壁面のほぼ中央の外側に2ヶ所確認され、直径は約0.3m検出面からの深さは約0.5mで、住居の中央に向かって柱が立つようにやや斜めに掘られていた。また、住居の床面をより水平にするために、アカホヤ火山灰層(第6層)、第8層、第9層の混土で10cm~20cm程貼床が施されており、この様な貼床は山田第1遺跡や滑川第1遺跡でも確認されている。また住居跡の埋土は10YR3/1黒褐色シルト質ローム土で、遺物は石皿が2点出土したのみであった。

第2節 集石遺構

E区においてはまず第8層上面において、赤変した角礫が数十個ないし数百個殆ど厚みを持たず堆積している状態の集石遺構が4基(SI-36等)確認された。

ここではその中でSI-36を取り上げるが、使用されている礫は約360個、約14kgで礫の下及び礫の間には炭化物は見あたらなかった。

蒸し焼き遺構というより準備礫もしくは廃棄礫の可能性が高いと推測できるが現段階では明言はできない。

その後、第8層上位から第9中位まで連続と礫は出土し続けるが(約1,600m²の調査区で約8,200点)、特に第9層上位付近ではそのピークを迎える。そのころから礫群の中に黒い丸いシミがぼんやり見え始め、礫を取り除いて少し検出



図版10 SA-1発掘状況(西から)



図版11 SI-36(西から)



図版12 SI-62(西から)

面を下げた第9層中位もしくは下位において円形の掘り込みを持つ集石遺構が明確にその姿を現し出す。掘り込みの大きさや深さ、充填されている礫の数、埋土の色(含まれる炭化物の量によって黒さが異なる)、また、底面近くに扁平な礫を配しているかいないか、などそれぞれの違いはかなり見られるが、このようにして検出された集石遺構がE区では35基を数える。(SI-14等)ここでとりあげるSI-14は、掘り込みの直径約1.1m、検出面(第9層下位)から底面までの深さが0.3mで、硬質な霧島小林火山灰層まで掘り込んであり、そのなかには約180個、約25kgの熱を受けて赤変した拳大の角礫が無造作に投げ込まれたように充填されていた。埋土は、掘り込み中央付近が炭化物を多量に含む黒色土で、壁面に近づくにつれ次第に茶褐色土になっていく、という状況であった。この他にも、第9層上位で約100点~200点の礫が丸くまとまった状態で堆積していた集石遺構が2基(SI-11等)確認され、これらは堆積している礫を取り除くと掘り込みらしきくぼみが出来るといったタイプの集石遺構であった。(礫の間には第9層よりややバサバサした土が入り込んでいた)

この様にE区においては大別して2つの層から計41基の集石遺構が検出されたが、滑川第1遺跡などでも見られた大型の集石遺構1基に対してそれを取り囲む様にして数基の小型の集石遺構が存在する、という状況は見受けられず、中型や小型の集石遺構が殆どだった。



図版13 SI-14(南から)



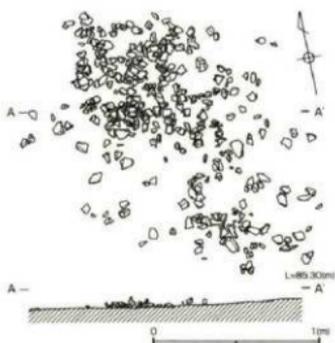
図版14 SI-1(南から)



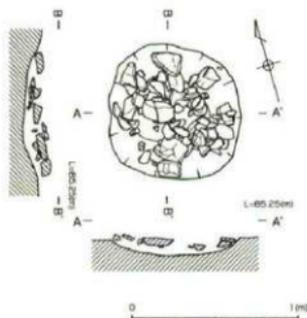
図版15 SI-33(南から)



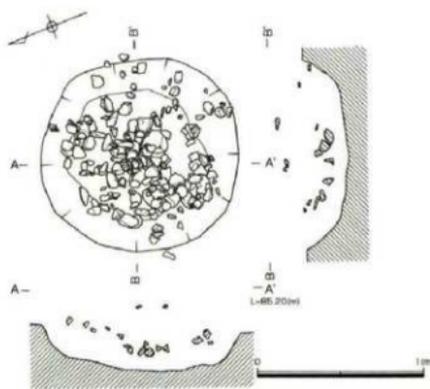
図版16 SI-11(西から)



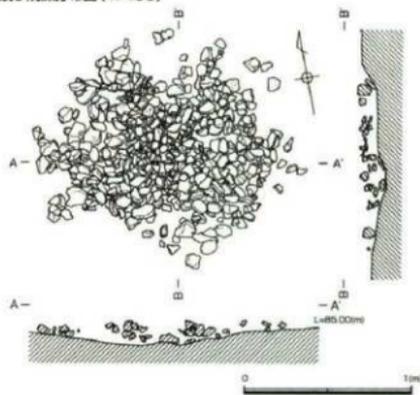
第9図 SI-36 (1/30)



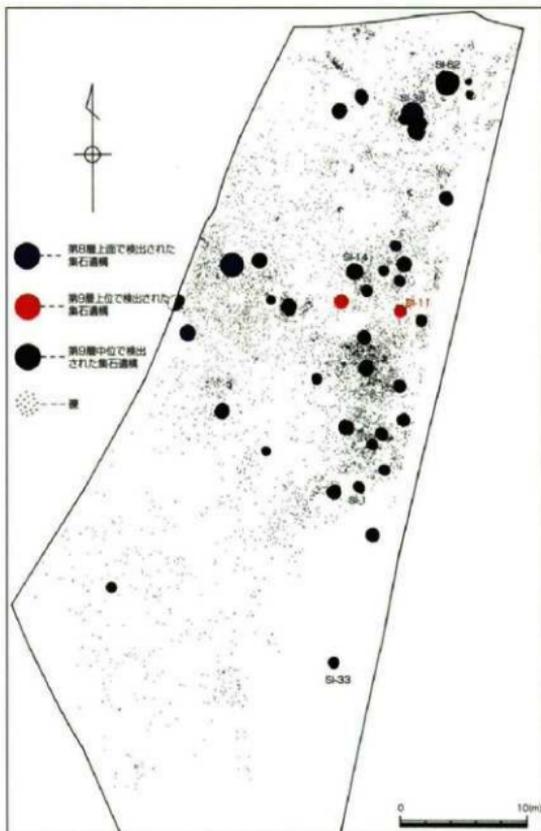
第10図 SI-11 (1/30)



第11図 SI-14 (1/30)



第12図 SI-1 (1/30)



第8図 E区集石遺構及び焼罎分布図 (1/400)

第3節 陥し穴

E区の北側斜面において、縄文時代早期の陥し穴(SC-1)が1基検出された(検出面は霧島小林火山灰層上面)。掘り込みの平面プランは長楕円形で(長軸約1m短軸約0.7m)、検出面から底面までの深さは約1.1m、尚掘り込みの途中では1段のすばまりが見られた。また、底面には3個の逆茂木痕と思われる小穴が確認され、中央の小穴は0.25m程掘り込んであった。

この様なタイプの陥し穴は、滑川第3遺跡・山田第2遺跡でも確認されている。

第4節 旧石器調査

E区で一部旧石器時代の調査を行ったところ、第12層(霧島小林火山灰層の下位)から焼礫群(SI-73)が検出された。約2.5m×約1.5mの範囲で、5~20cm程の礫が約220個集中している状態であった。また、第12層~第14層においては、ナイフ形石器、三稜尖頭器、剥片なども検出されている。尚、この様な旧石器時代の焼礫群は、滑川第2遺跡・滑川第3遺跡でも確認されている。

第5節 小 括

E区では竪穴式住居跡、連穴土坑、陥し穴、旧石器の礫群など様々な時代の遺構が確認されたが、いずれも現代耕作による削平の影響もあり、1基ないし2基のみの検出で、遺構の性格を把握するにはいささか厳しい状況であった。また、集石遺構については中型から小型の集石遺構が多く、近隣の白ヶ野第1遺跡や滑川第1遺跡の集石群とは少し異なる状況であったが、これは集石遺構周辺の焼礫の密度となんらかの関係があるのではないかと現在のところ推測している。



図版17 SC-1 断面(西から)



図版18 SI-73(北から)

第4章 出土遺物

本遺跡では数多くの遺物が出土したが、近隣遺跡同様縄文時代早期の遺物が中心であった。B区とE区で集中して遺物が出土したが、それぞれの調査区の出土遺物の特徴を挙げると、B区では、押型文土器、壱ノ神式土器などが出土し、特に押型文土器については集石遺構や連穴土坑の掘り込みのなかからも出土した。次にE区については、前平式系、吉田式系の早期貝殻文土器や壱ノ神式土器などが出土しているが、前平式系・吉田式系の早期貝殻文土器については、白ヶ野第4遺跡、山田第2遺跡そして本遺跡E区とこれらの遺跡が立地するシラス台地のなかでも、比較的標高の高い遺跡で出土しているのが特徴である。

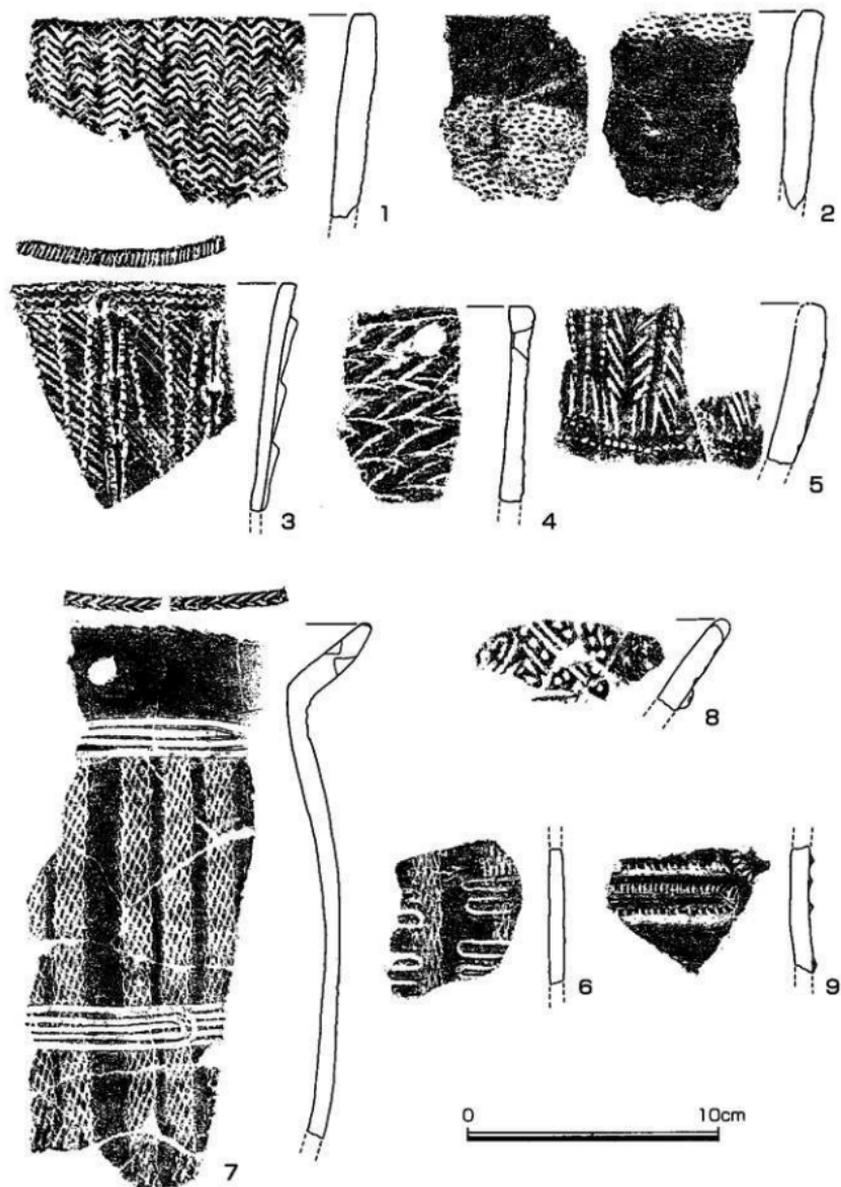
また、石器については、石鏃、磨石、三稜尖頭石などが各層から出土しているが、石材は黒曜石（姫島産を含む）、砂岩、頁岩、チャートなどが使用されていた。

第5章 まとめ

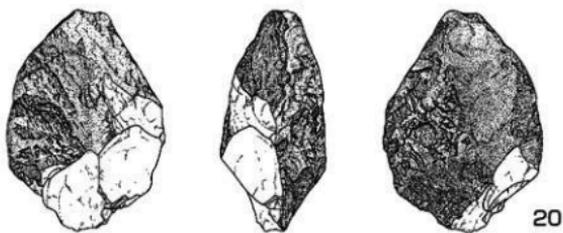
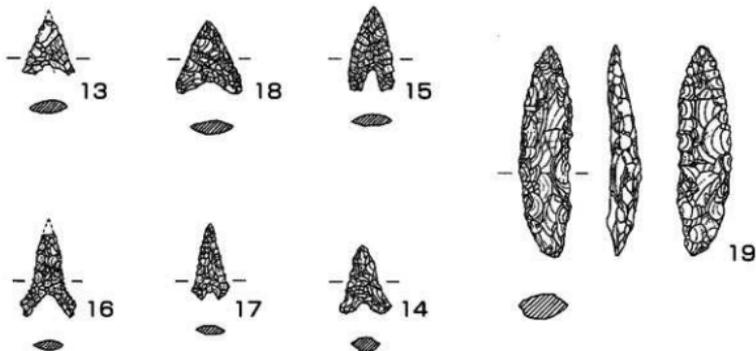
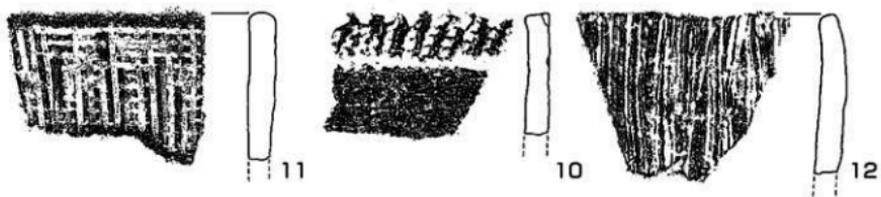
本遺跡の調査は、新設される道路・排水路部分及び削平せざるを得ない部分においてのみ行ったため、遺跡の全体を把握することはできなかった。そこで、近隣の白ヶ野第1・4遺跡、滑川第1・2・3遺跡、山田第1・2遺跡と関連づけて考察し、本遺跡の特徴を見ていきたい。まずB区については、シラス台地上の平坦部分の端、言い換えれば河岸段丘に入り込んだ谷を望む場所に立地しており、これは滑川第1遺跡や山田第1遺跡の立地条件と同じである。そのため散石と集石遺構の状況や出土している遺物などはよく似ていたが、集石遺構と連穴土坑が切り合った状態で確認されたことは本遺跡が他の遺跡と異なる点である。切り合った連穴土坑に幾つかのタイプが見られたり、遺構の掘り込みのなかにかかなりの遺物が入り込んでいたり幾つもの注目点が挙げられるが、今後はそれらを慎重に考察しなんらかの結論を導き出したい。また、台地平坦部を見下ろす丘陵尾根部からの緩斜面上に立地する山田第2遺跡から台地平坦部へと下る途中に立地するE区については、陥し穴や連穴土坑のプラン、また出土遺物などは山田第2遺跡とよく似ていたが、集石遺構については中型や小型のものが多いという特徴を持っており、これは、掘り込みの直径が2mを越え、1t近い焼礫を使用した様な巨大な集石遺構が確認された白ヶ野第1遺跡や滑川第1遺跡とは異なるものであった。

この様に、本遺跡では少し異なる立地条件のB区とE区が主たる調査の対象であったが、お互いの比較や近隣遺跡も含めた上での検討を重ねていくことによって、この台地上での人々の生活の様子を少しでも解明していきたい。

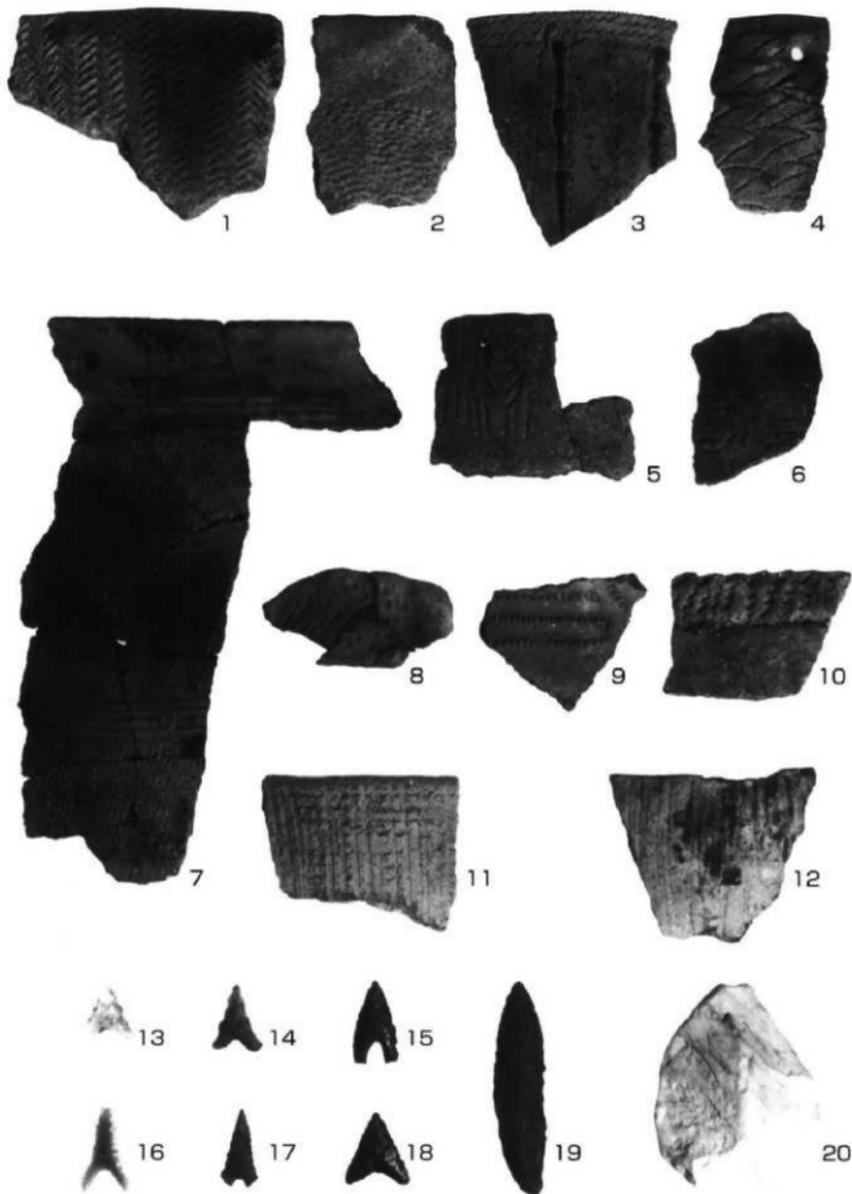
以上が今回の調査についての主な考察である。



第13圖 坂元遺跡出土遺物実測圖1(1/2)



第14圖 坂元遺跡出土遺物実測図2(1/2)



図版 19 坂元遺跡出土遺物

調 査 抄 録

フリガナ	サカモト イセキ					
書名	坂元遺跡					
副書名	県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査概要報告書					
巻次	第1集					
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第9集					
編集者名	井田 篤					
発行機関	清武町教育委員会					
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地					
発行年月日	2001年3月					
所在遺跡名	所在地	市町村:遺跡番号	北緯	東経	調査期間	
坂元遺跡	清武町大字 船引字坂元	清武町:206	31° 52' 20"	131° 22' 10"	00.04.25～ 00.12.18	
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
9000m ²	農業関連	集落	旧石器 縄文	集石遺構 陥し穴遺構 竪穴式住居跡	縄文式土器 石器	

清武町文化財調査報告書 第9集

坂元遺跡

発行年月 2001年3月

編集・発行 清武町教育委員会

印刷 株式会社宮崎南印刷

